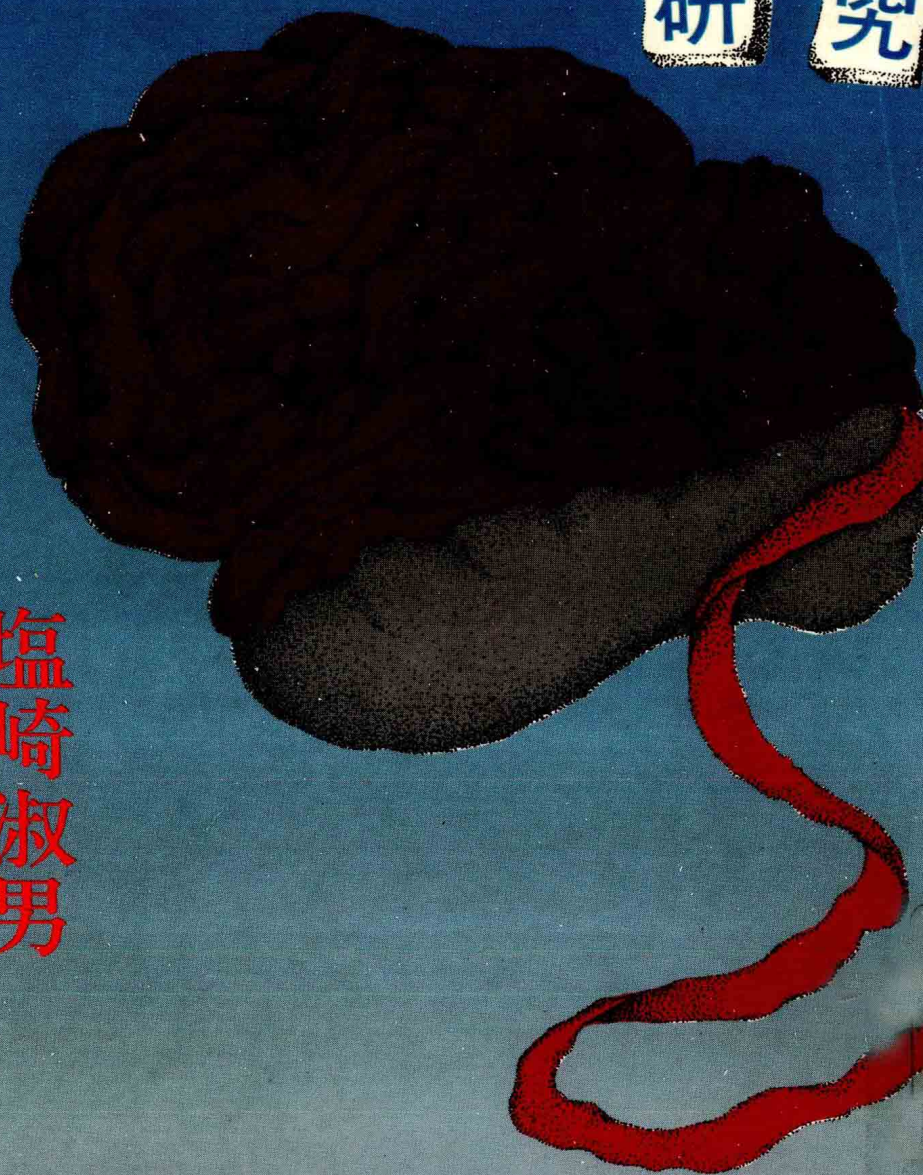
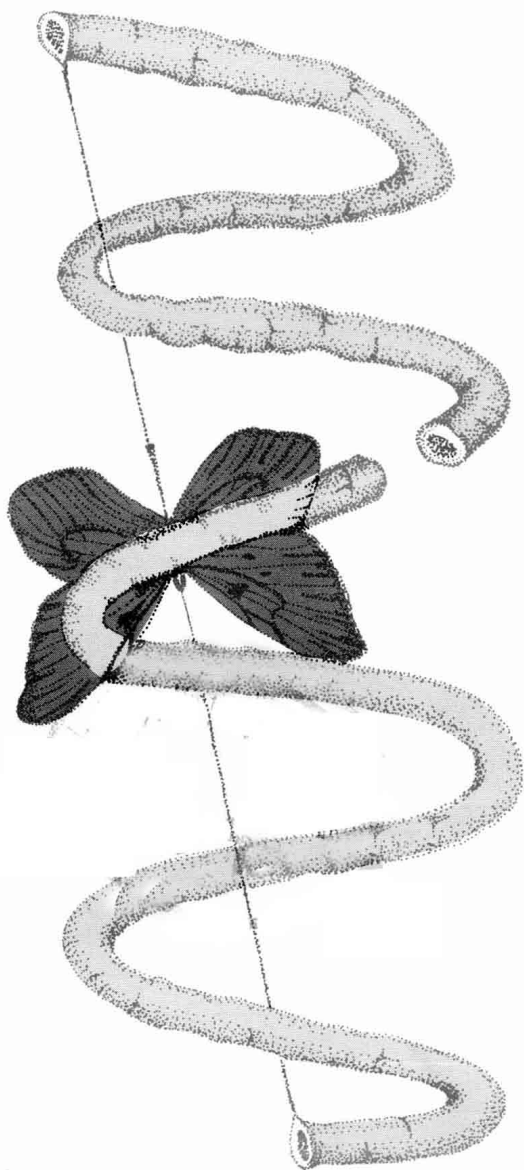


パ ト グ ラ フ ィ ー
研 究



塩崎淑男

塩崎淑男



略 歴

1910年 横浜に生まれる。
1936年 慈恵医大を卒業
1938年 九大精神科教室に入局
1942年 医学博士
1953年 横浜市港北区篠原町92番地に開業（精神・神経科）
1958年 横浜市保土ヶ谷区常盤台 241 番地に常盤台病院を開設、院長となる
1978年 病院を医療法人とする
1981年 院長を辞め医療法人静心会常盤台病院理事長となり現在に至る
著書 漱石・龍之介の精神異常
（白揚社）
現住所 横浜市港北区篠原町92（〒222）
TEL. (045) 421—8182

パトグラフィー研究

1983年1月10日 第1刷発行

著 者 しおざきとしお
塩崎淑男

発行者 福澤英敏

発行所 近代文藝社

〒 151 東京都渋谷区代々木 2-23-1-957

電話 東京 (370) 7839 振替 東京 7—68875

定 価 1000円

印刷所 鬼灯書籍株式会社

© Yoshio Shiozaki 1983 Printed in Japan

ISBN 4—89607—322—3 C 0095 ¥1000E

落丁本・乱丁本はおとりかえます。

パ
ト
グ
ラ
フ
ィ
ー
研
究

目
次

目次

パトグラフィー研究

漱石の病氣	9
芥川龍之介の不安	19
漱石と龍之介の精神異常	28
永井荷風と谷崎潤一郎	40
谷崎潤一郎	44
1 生立ち	44
2 神経衰弱症	47
3 性格	72
4 病歴（成人病より終焉まで）	80
5 結び	83
宇野浩二	93
浩二の恋愛	105
太宰治	110
土門拳のこと	114
土門拳	119

思い出

森田正馬先生

..... 139

下田光造先生

..... 145

高良武久先生

..... 150

三人の先生

..... 154

野村章恒先生

..... 157

金杉英五郎先生と高木喜寛先生

..... 161

本田貞利君

..... 163

随筆その他

..... 165

外来語と語学・不運・昇天・桜散る・フランケンシュタインの話・
コレクション・コンプレックス・歌に関する私の思い出・ヒロポン
少年・帰還

装丁
門脇由紀

パトグラフ
イ
ー
研究

パト
ト
グ
ラ
フ
イ
ー
研
究

漱石の病氣

夏目漱石はその生涯で何回かの精神病的危機に直面した。彼の病氣については、研究者の間でもいろいろの病名がつけられている。

抑うつ・妄想症候群（伊東高麗夫）

内因性うつ病（千谷七郎、加賀乙彦）

混合精神病（西丸四方）

非定型精神病（春原千秋）

人格反応（鹿子木敏範）

精神分裂病（土居健郎）

神経質（佐藤政治）

佐藤政治氏の神経質というのは神経質症に見られる敏感関係妄想と云う意味ではないかと思われるが私は文献を読んでいないのではっきりしたことは分らない。

私は昭和三十二年に「漱石・龍之介の精神異常」を書いたが人格反応（敏感関係妄想）と考えた。その後いろいろの文献に接するようになり、私の考え（診断）についても考えてみた。千谷氏の内因性うつ病についてはこれは、漱石の執着性気質から見て充分考えられる所ではあるが、漱石には

うつ病に見られる日内変動などないし、不安も自責感も着明でなかったこと、漱石にはかなり攻撃的要素があり、病期で悪い時にも仕事をしており、能率はさがっていない。大学での講義などもキチンと休まずやっていたし、また、和辻哲郎氏らの書いたものを読むと对人的態度なども普通であったと云うことから内因性うつ病と考えることにも抵抗がある。

西丸四方氏の混合精神病という考え方も遺伝因子がはつきりしないので混合精神病と断定してしまふことにも問題があると思う。

土居健郎氏の精神分裂病——漱石の病気を分裂病と考えるのは、漱石にはその後も人格のくずれなどなく錯聴や追跡、被害妄想のひどかった時でも対外的態度には変った点はなく、人格も完全に保持されていたこと、性格は晩年になるに従って円満なものとなり、円熟し巾と深さを加えていつていること、彼の自我对社会との対決から晩年「則天去私」へと向って行った経緯、発展は飽くまで人間的、合理的なものであり了解心理学的にも十分理解可能な発展である点などより分裂病と考えてしまうのも問題であると思う。私は矢張り人格反応として妄想が發展して行ったと考えるのが妥当であると思う。

漱石は陽気・楽天的などの面もあったが、反面理屈っぽい、反対のための反対をいうような所（我執とも関係あると思う）があり、つむじ曲り、神経過敏でいつまでもひとつことに拘わる点があった。彼は倫理的にも潔癖であり、真面的でひたむきで曖昧なことや妥協が嫌で何ごとにも徹底的に追求しないとやまない所があった。彼の性格の大きな特徴は敏感で我執の強い所にあった。理由のない妥協が出来ない人であった。このような性格は社会生活をしてゆく上に、それが純粹であればあるほど現実との接触においては摩擦や軋轢を生じ易いもので、環境や誘因の力がそれほど強力でなくとも容易に異常な反応をひき起し易いものである。

漱石の強い正義感はときに相手の面皮を剥ぐ仮借のないものともなった。

漱石が幼い頃養母が悪口を云った人の前で心にもない嘘を他人に云うのに我慢出来ないで嘘を云っていると云って嘘を暴いた話や小学校で先生が記元節と黒板に誤って書いたのを紀元節と直し、このことが下品なことであると子供に残ったという話などが「道草」や「永田小品」に書いてあるが、これも漱石の性格のこのような現われである。このような漱石の性格は周囲からは受け入れられないものであった。変物として孤立することにもなった。しかし漱石は孤立して淋しいとは思わうがそのため妥協することはしなかった。漱石にとって社会生活はこの「我」との戦いでもあった。

彼はこの小さな「我」と社会との対立に苦しみ、血みどろな斗いのあげく、彼が「則天去私」を志向するに至ったことも容易に想像し得る所である。

また彼の発病には過度の勉強、困窮、学問上の煩悶、異郷の生活（郷愁）、家庭環境、夫婦間の不和（夫人側にもヒステリー発作などあった）身体疾患（胃潰瘍、糖尿病）など誘因と思われるものがあり、また治癒の場合も転地、転居、創作活動などでうつ懷を発散し、治っていること、また胃潰瘍で伏床し、安静をとらざるを得なくなったりすることで軽快し落付いて行っていることなど挙げることが出来る。殊に帰朝後の險悪期には創作を始め出す（「猫」もこの時の作品だが）ことによりうつ懷を発散し、これが治癒に結びついている。創作は彼の場合、発散、開放、カタルシスの役目を果していたように思われる。創作により昇華が行われたのだと思う。

また彼の場合は状態の悪い時でも大学の講義などキチンと普通にしていたし、創作意欲も衰えず旺盛であった。思路の異常も、不可解な要素の介入や神秘主義的世界観への発展なども全く認めることが出来ない。

晩年における彼の志向（則天去私）などもその性格から考え、正常な発展の結果であり、人間的、合理的なもので了解心理学的にも十分了解可能な発展（展開）である。

最近、斉藤茂太氏が「躁とうつ」の中で漱石の病氣について書いておられる。

氏は人格反応説をとり上げ、第一回目、第三回目的ものは人格反応と考えてもよいが、第二回目的の症状は帰国後にも及んでおり、人格反応と考えるのには少し期間が長すぎ、内因性のものが加わったと考えた方がよいのではないかと云っておられる。

また漱石の疑深い、猜疑心の強い傾向については、漱石が幼時養子に出されたり両親の愛情を充分に受け得なかったりした幼時の環境から自己防衛機制によって加わったものではないか、と考えておられる。これは斉藤茂吉の場合も同様で、茂吉も養子故に苦勞し、結婚生活も余り気の合わない、我がままな家つき娘である妻との生活、嫡子との間に挟まっただけの苦勞などがあり必ずしも恵まれたものではなかった、茂吉にも疑深く素直にもものを受取らない点がありこの点も漱石と似ているとも述べている。

斉藤茂太氏のご指摘の漱石の疑深い猜疑心の強い傾向については幼児環境から自己防衛機制によって加わったものではないかとの考えには全面的に賛成である。

ただ第二回目的の漱石の精神症状が留学を契機に起った反応としては長すぎるのではないか、反応ならば帰国したら治るのではないかとの疑問に対しては私としては漱石の当時置かれていた立場（「道草」に書かれてある）を考えるとよくならないのも当然のような気がする。

これは「道草」の中にも書かれているが、帰国後の彼の生活は大変なものであった。

家庭の困窮、家探し、学校との問題、肉親や養家からの無心、妻の無理解など難問題が山積し、

神経の安まる暇がなく、依然として緊張の連続であつた。これではよくならないのも当然であつたと思われる。

漱石が帰国直後に長女にいきなり平手打ちを食わせた話は有名である。

ロンドンにいた時、街を歩いていると乞食が哀れっぽく金をせびるので哀れになつて銅貨を与えた。下宿に帰つたらその銅貨と同じものが、これ見よがしに便所の窓に乗っていた、ふだんから自分のあとをつけ、探偵みたいなことをすると思つていたが、宿の主婦さんがやっぱり自分の行動を細大洩らさず見ていたのだ。それと同じような銅貨が同じくこれ見よがしに火鉢の縁にのせてある。いかにも人を馬鹿にした怪しからぬ子供だと思つて一本参つたのだということだつたと云う。

これは確かに不可解な考え方である。

根底にあるのは追跡妄想であらうが妄想知覚を思わせる体験（意味体験）である。

夫人の一方的な供述であるので真疑の程は明らかでないが、精神医学的には充分あり得ると思われる話である。

若しこれが本当とすれば漱石を分裂病と考えることも誤りではなく、斎藤氏の云うように内因性因子が触発され起つたものと考えるべきかも知れない。

しかしその後の漱石の生活状態や即天去私に到る道程など考えるとこれも一過性のものだったと考えてよいと思う。妄想知覚や意味体験は一過性のものでも起り得る。

しかしある時期、漱石はこのような險悪な状態にあつたことは確かであろう。

夫人の「漱石の思い出」にある家の前の下宿の学生に対する漱石の態度なども理解に苦しむものである。探偵君、これから出掛けると云つて断つたりするのもおかしい。

又この頃出勤したあと書斎に入ると机の上に墨黒々と半紙に

予の周囲のもの悉く皆狂人なり　それがため予も亦狂人の真似をせざるべからず　故に周囲の狂人の全快をまつて予も伴狂をやめるもおそからず

などと書いてあったと云う。

これなども漱石の態度の積極的、攻撃的、戦斗的であったことを示すものであろう。

夫人の「思い出」によれば、漱石の病氣は死ぬまで治り切りと云うわけにはゆかず、ときどき思い出したように起っていたと云うが、昭和三十年雑誌「世界」の八月号に発表された「伏せられていた漱石の日記」（小宮豊隆）を読むと夫人や女中に対する不快、不満が極めて露骨に書かれてあり、「思い出」に書いてあることが決して嘘でないことが分る。

「伏せられていた漱石の日記」は大正三年（一九一四年）十月三十一日から十二月八日までの分である。大正三年と云えば「思い出」にあるように「神経衰弱」の甚だしかった時期ではない。大正三年九月十日前後から漱石はまた持病の胃（胃潰瘍）が悪くなり困っていたというから氣分的にもいらいらした状態にあったことは事実であろう。しかしこれとても客観的に周囲から見ると特に異常を認めるほどのものではなかった。少くとも夫人から見るとその程度の甚だしかった時期ではなかった。

そのような時期にも漱石がこのような日記を書いていたと云うことは非常に興味あることである。日記に見られる彼のものの受けとり方、考え方は明らかに正常でなく、過敏にすぎ、被害的、関係妄想的である。夫人に対する不快の念を露骨にかいているが、恐らく鏡子夫人でなく誰が妻で